

# 淡路景観園芸学校 SDGs 通信

開校から21年が経過した淡路景観園芸学校。全国から淡路島に集まった教員、学生が淡路島の地域に密着し、自然と共生する持続可能な社会の構築に向けて様々な取り組みを進めています。2019年からは、教職員と学生でSDGs推進チームを結成し、活動を開始しました。今回は、創刊号で紹介したヤギ除草や日本ミツバチ養蜂、土部のその後の活動状況やサイクルツーリズム、外来種駆除などの新たな取り組みも紹介します。

## SDGs 達成のヒントは 淡路島の暮らしの中にある

淡路景観園芸学校は全寮制なので、学生はみんな淡路島で生活しています。SDGsについて話し合うなかで、昔から自然とうまく付き合ってきた淡路島の人々の暮らしが見えてきました。その知恵を受け継ぎ、SDGsに生かしていくために、「SDGs島暮らし宣言」をまとめました。



### 島暮らし宣言

淡路景観園芸学校は、淡路島の豊かな自然の中にあります。私たちは、そんな豊かな自然の恵みを活用しながら「淡路島らしい生活」を目指して活動しています。

「淡路島らしい生活」とは何でしょうか？  
たとえば、廃材を利用してコンポストを作ったりそのコンポストからできた腐葉土を畑に使ったりヤギさんに学内の雑草を食べてもらったり巣箱を作ってハチミツ集めをしたり…

いろんな恵みが巡り巡る、そんな暮らしをしています。

もちろん淡路島ではなくても、どこでも・簡単に誰でもできることもたくさんあります。この活動を参考にぜひ貴方もやってみてください。



### 土部活動状況レポート

#### ひと手間かかるコンポスト、続くかな？

今年の3月から設置しているレジデンス（学生寮）の生ごみコンポスト。野菜くずなどの生ごみを減らし、さらに堆肥として利用できるようにしよう！というこ



とで始めました。正直、始めの頃は「ちゃんと続くのかなあ」と思っていました。というのも、そのまま捨てればよい生ごみを、わざわざコンポストまで持って行かなければならない。またコンポストに入れてからも、定期的にかき混ぜて空気を入れる必要がある。さらに、時には米ぬかを入れて微生物が働くように管理が必要。適度な湿度を保ち、雨に濡れないように、反対に暑くて湯きすぎたら水をやることなど、大きな負担にはなりません。が、「ごみ」に対してみんなそこまでやってくれるのかな、といった思いがありました。

#### みんなの意識は高かった

しかし、コンポストを覗くたびに確実に増えているごみ。また近くを通った時に真剣にコンポストをかき混ぜている人の姿。コンポストは「ごみを捨てる場所」ではなく、「土を作る」という思いで行われていると感じました。しつかり混ぜて米ぬかを投入した次の日には湯気が出ます。3月から作り始め5か月たった今では、確実にごみが土へと変わってきています。今後はコンポスト普及のため、家庭やオフィスでもできる、簡単なコンポスト開発にチャレンジしていきたいです。



土を攪拌中

#### 編集後記

コロナ禍の不安な生活。その中で確かなものは、身近な自然の営みでした。満開の桜、子育てをするツバメ、牛が草を食む草原。でも、ある日、近所の田んぼが耕されなくなったり、日本ミツバチが減少していたり、当たり前だったものが失われていて愕然としました。身近な環境に目を向けることが、SDGsの活動の一歩に繋がっています。

編集 淡路景観園芸学校 SDGs 推進チーム  
林まゆみ 澤田佳宏 三木直樹 守宏美 光成麻美  
菊川楓月 菅井暁乃 谷河澤 堀内修平 難波梨菜  
武部絵里香  
デザイン 光成麻美  
発行元 656-1726 兵庫県淡路市野島常盤 954-2  
兵庫県立淡路景観園芸学校  
TEL : 0799-82-3131 FAX : 0799-82-3124



### 地域資源をめぐるサイクルツーリズム

「淡路島といえば海」という印象が強いかもしれませんが、本校が位置する山間部には日本の原風景ともいえる魅力的な地域資源がたくさん残されています。こういった風景を今後も残していくために「今ここにある当たり前前の景色」を地域の方々や観光で訪れる方々に知ってもらいたいなと思っています。しかし淡路島の山道はとても急峻で狭く、自動車では走るには少し不安になります。

#### 淡路の山道に強い味方 e-BIKE

そこで、自動車よりも環境負荷が少なく、気軽に走行できるスポーツサイクル型の電動アシスト付き自転車（e-BIKE）を用いて地域資源を巡るプロジェクトを計画しています。このプロジェクトは、古田菜穂子特任教授の「地域資源・観光プロデュース」の授業を履修している学生と一緒に検討しております。「花みどりフェア」の事業の一環でもあります。先日は学生とともに長澤地区をe-BIKEでめぐってきました。初めて乗る学生たちは興味津々。「ここは自然のテーマパークだ！」と風景を喜んだり、「自動車よりも自分だけのお気に入りの場所を発見しやすい！」と、e-BIKEの可能性を実感していました。



自転車から降りて澤田先生と群衆



棚田とため池探検に出発！ e-BIKE 以外の自転車にも乗りました。



#### 【インスタトラクター 光成麻美】

「インストラクターでもあり、花みどりフェアの事業の一環でもあります。先日は学生とともに長澤地区をe-BIKEでめぐってきました。初めて乗る学生たちは興味津々。「ここは自然のテーマパークだ！」と風景を喜んだり、「自動車よりも自分だけのお気に入りの場所を発見しやすい！」と、e-BIKEの可能性を実感していました。



カイツカイブキの下で雨宿り

#### 【11期生 谷河漣】



オオフサモ壊滅を目指す



オオフサモ撤去前 手前が遮光処理装置

エコ池では、2015年から毎年オオフサモの駆除作業を実施しています。作業はオオフサモの刈り取りだけでなく光合成をさせないようオオフサモを遮光シートで覆ったり、繁茂を食い止める板“防衛ライン”を設置しています。オオフサモの繁茂するエリアは小さくなってきていますが、まだ壊滅には至っていません。



セトウチサンショウウオ

遮光処理の効果



駆除作業中

3・4年前に設置した遮光シートを取り外しました。すると、シートの下にはオオフサモが全く無いエリアが広がっていて、遮光処理が効果的であることがわかりました。作業では、太ももまで浸かるほどの水位があり動きにくいこと、オオフサモの移動が重くて大変なことから徐々に体力が奪われていきました。しかし先生方や同級生と作業したことで元気が出て最後まで楽しく作業ができました。

駆除の必須アイテム “パン切り包丁”



作業後

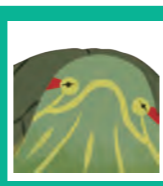
実はオオフサモの茎を刈るには、鎌ではなくパン切り包丁がおすすめです。切れ味が良くサクサクと切れました。茎の断片が少し残っているだけでも繁殖できるため、刈った後に浮かんでいる断片を丁寧に網で取り除きました。作業前はオオフサモやガマで繁茂していたエコ池ですが、作業終了後は水に浮かんでいるものが何も見えないほどきれいになりました。



トノサマガエル

作業中、セトウチサンショウウオ、イシガメのこども、トノサマガエル、コオイムシなどの生き物を発見!

イシガメ



特定外来生物「オオフサモ」の駆除を学ぶ

校内にある直径6mほどの通称「エコ池」では、特定外来生物のオオフサモ (Myriophyllum aquaticum (Vahl.) が繁茂しています。在来水生生物と競合・駆逐したり、農業用水路に繁茂すると水路の流れを妨げたりと影響を及ぼすため「日本の侵略的外来種ワースト100」にも指定されています。授業の演習で作業をしながらオオフサモの駆除を学びました。【12期生 難波 梨菜】

学内ヤギ除草実験 @ 学内の草原再生ゾーン

ここでは学校周辺の畦畔から、在来の草原性植物の種をとって播種しています。除草効果は写真の通り、しっかり確認されました。チガヤを中心とした在来植物のある植生がどう変化するのか、今後も観察していきたいと思います。



7月17日 除草実験開始



7月30日 除草効果あり!!



2代目 ゆきちちゃんがやって来た

に、ロープを金属の鎖に変更したところ、絡みがなくなり、一つ問題が解決しました。昔はヤギ乳を飲むための飼育でしたが、最近では除草のために飼いはじめの方も多くなりました。インタビュアーを積極的に引っ張って、淡路島のヤギネットワークを広げていきたいです。  
**好き嫌いのあるヤギたち**  
ヤギたちには好き嫌いもあります。イネ科やマメ科は夢中で食べますが、セイタカアワダチソウはあまり好きではないようです。また、実は樹木が大好きで、サクラの木をそばで繋牧をしたときには飛びついて食べていました。しかしある日、夢中になりすぎて足を滑らせ、木の根元に挟まってしまいました。救出したものの自力で立てず、獣医を呼ぶ大参事になりました。障害物や根本が枝分かれした木には注意して、ヤギをつなぐ場所を決める必要があります。【11期生 菅井 暁乃】



サクラに挟まるゆきちちゃん

環境に負荷を与えないヤギ除草実験のため、3月までいた初代「ゆきちちゃん」に引き続き、5月末から「2代目 ゆきちちゃん・こゆきちちゃん」親子を飼育しています。畦畔の細長い地形の草を食べてもらうために、2つの土嚢の間に4メートルほどのロープを張って、その間を自由に動けるようにしています。しかし、ロープが足に絡まってしまうことがよくあり心配の種でした。そこで、近所のヤギの飼育を参考に、ロープを金属の鎖に変更したところ、絡みがなくなり、一つ問題が解決しました。昔はヤギ乳を飲むための飼育でしたが、最近では除草のために飼いはじめの方も多くなりました。インタビュアーを積極的に引っ張って、淡路島のヤギネットワークを広げていきたいです。



日本ミツバチ養蜂から考えるSDGs

日本ミツバチの養蜂は「待ち」の養蜂です。西洋ミツバチ養蜂は、ハチを外から購入しますが、日本ミツバチ養蜂はハチの好む場所に空の巣箱を設置し、自然にハチが入るのを待ちます。2020年3月に、学内に10個の巣箱を作成・設置しました。ハチが好む環境に巣箱を設置することで、入居してくれる確率が上がるそうです。好む環境は、日当たりがほどほどで南向き斜面の開けた木陰です。これは、巣箱内の気温が上がり過ぎないようにするためで、ハチもそのことがわかるようです。良い物件に住みたいと思うのは、私たちと同じですね。

淡路島に「沈黙の春」来る

しかし、今年は全くハチが入居しませんでした。設置場所だけでなく、日本ミツバチの個体数が減少していることも原因かもしれません。近所の日本ミツバチ養蜂家森本さんによると、淡路島でアカリンドア二が広がっているそうです。アカリンドア二は2010年ごろから日本で確認されるようになったハチに寄生するダニです。働き蜂同士の接触によって伝播し、淡路島では去年から影響が出てきています。このダニに寄生されるとハチは飛翔が困難になり、重症化するとコロニー(群れ)が全滅することがあると言われています。アカリンドア二についてまだ明らかになっていないことが多いので、淡路島の日本ミツバチが回復するのか未知数です。また、植物の受粉を仲介するハチの減少により、植物の実りに影響が出ないのか気になります。一つの昆虫の変化が環境にどのような影響を及ぼすのかが注意深く見ていく必要があります。【11期生 堀内 修平】



野のものを美味しくいただく「野食部」始動

私がアカミミガメの天敵になる!

ある日、野生のミシシippアカミミガメが学生寮付近で見られました。保護した後、アカミミガメを引き取ってくれた水族館へ渡し、そこで暮らしてもらおうと考えていたのですが、ふと思いました。「水族館にアカミミガメを渡したら、限りあるスペースが埋まり、後から来るアカミミガメのスペースがなくなってしまうのでは」と。ペットとして可愛がられていたアカミミガメ。水族館が受け取りを拒否した場合、泣く泣く外へ逃がす人がいるかもしれない。それなら、渡さずにアカミミガメを食べる...もとい、自分がアカミミガメの天敵になれば、安楽死させるよりは自然界的な行動ではないかと考えました。



アカミミガメを美味しく食べてみよう

アカミミガメの調理方法を調べ、アカミミガメを捌き、美味しく調理。内臓煮込み、手足唐揚げ、キンカン煮、ゆで卵が完成し、カメラパーティーの始まりです。気味悪がる人も、食べれば美味しいと高評価。外来種の命を別の形で活用することは、増殖抑制に繋がるのかもしれない。【12期生 武部 絵里香】



\*アカミミガメは、積極的に防除を行う必要がある「緊急対策外来種」に位置付けられています。

